

地域の特色を活かした地域・病院・多胎児サークルが協働して行う多胎児支援の検討

名和文香 服部律子 谷口通英 布原佳奈 宮本麻記子 武田順子 坪内美奈 両羽美穂子(大学)
田口由紀子 福士せつ子 小木曾美喜江(県立多治見病院・東1階) 谷口知子(多治見市保健センター)
田中圭子(東濃保健所) 杉原愛(大野町役場) 國井真美子 小山美香 河合美奈(羽島市保健センター)

I. はじめに

近年、体外受精や顕微授精の発展に伴い、多胎妊娠率は増加しており、1996年には、出産千に対し9.3であったが、2005年には11.8、2006年には11.6と増加している¹⁾。岐阜県においても、多胎児出産は増加しており、出産千に対し2005年には13.3、2006年には14.8と全国平均を大きく上回っている²⁾。妊娠期には、異常の発生率も単胎妊娠に比べ高く、ハイリスク妊娠として注意が必要であり、周産期死亡率も高い³⁾。さらに、多胎妊婦は、単胎の場合と比較すると、妊娠期から不安が高く、育児期には、多胎児の育児の大変さから^{4) 5)}、心身ともにストレスが高くなり⁶⁾、育児に対する不安も高まる⁷⁾とされている。そのため、妊娠期からの母親とその家族のサポートが重要である。

岐阜県が多胎児支援の動向として、2006年に「ぎふ多胎ネット」が発足し、多胎児支援活動が活発になったが、未だ増加する多胎妊娠・出産に支援が追いつかない現状があり、早急な対策が望まれる。また、多胎分娩数は増加しているが、地域によって取り組みが様々であり、妊婦にとって、十分な支援に至っていない地域もある。よって、保健センター、医療機関、多胎児サークル、研究者が集まり交流や情報交換に取り組むことで、多職種が協働して行う支援の重要性が浮き彫りになり⁸⁾、2005年より、「双子のプレママパパ教室」を開催し、地域と病院、サークルが連携した取り組みを進めてきた。多胎児教室は、岐阜県では前例がなかったが、今年度で4年目となり、事業化されている。また、多胎妊婦を対象に、妊娠期と育児期に調査を行い、教室の評価と双子の妊娠・育児について実態を調査している。また、他市においても、多胎児支援の重要性が話し合われ、昨年度より、継続事業として集いが行われている。

II. 目的

本研究の目的は、多胎児家族への妊娠期からの継続した介入方法、および多胎児支援における行政、病院とサークル等の協働体制について検討することである。

III. 方法および結果

1. 現地側の取組み体制、協働体制

A市においては、教室を開催するにあたって、保健師、助産師、看護師、多胎児サークルが協働して行うため、開催にあたって情報交換をし計画した。昨年度は、開催市以外の地区からの参加者のみであることが続いたため、今後の教室の開催方法について検討し、今年度より、A市を含む5市が協働し、持ち回り制で実施した。

B市においては、昨年度からの継続事業であり、多胎児家族に対する支援のあり方と、その方向性が話し合われた。また、集いの実施方法について、毎回参加者から意見を募り、参加者の要望に即した、より良い方法を模索した。

2. 双子のプレママパパ教室の実施(A市)

1) 開催について

この教室は、2005年から開催されており、今年度は、第6、7回の2回(6月、12月)実施した。

2) 教室の趣旨

教室の趣旨は、次の3点である。

- (1) 妊娠中から、分娩や育児など正しい情報を得てイメージすることができる。
- (2) 多胎妊婦同士、家族の交流を図り、情報交換や悩みなどの共有ができ、ストレスの軽減につながる。
- (3) 行政、病院やサークルが協働し、地域全体で多胎児支援を行うことによって、情報を共有でき、いろいろな角度から支援することができる。

3) 実施内容

- (1) 教室の趣旨と今後の支援(保健師)
- (2) 自己紹介(参加者全員)
- (3) 妊娠中の日常生活の過ごし方、分娩と入院生活(病棟助産師、本学教員)
- (4) 育児・授乳・沐浴など、多胎児サークル紹介と育児体験(多胎児サークル)
- (5) 交流会、質疑応答(参加者全員)

4) 参加者およびスタッフの概要

2005年度から4年間の調査をまとめた。

(1) 参加者

教室参加人数は、2005年度(1回開催):妊婦とその夫9組、妊婦とその祖母1組の計20名、

2006年度（2回開催）：妊婦とその夫6組、妊婦とその祖母1組、妊婦のみ4名の計18名、2007年度（2回開催）：妊婦とその夫4組、妊婦のみ1名の計9名、2008年度（2回開催）：妊婦とその夫5組、妊婦のみ1名の計11名であり、2005年から4年間で、計58名（妊婦32名、夫24名、祖母2名）であった。妊娠週数は、12～32週（n=32）であった。

(2) スタッフ

スタッフは、A市保健センター保健師、病院（A市）助産師・看護師、C・D保健所保健師、A市以外4市の保健師、多胎児サークル、本学教員である。

5) 調査方法および内容

「双子のプレママパパ教室」に参加した妊婦およびその家族に対し、質問紙調査を行った。この質問紙は、A市保健センターが、参加者の教室に対する意見を参考にするために作成したものである。参加者には、教室終了後に配布し、その場で記入してもらい回収した。

調査項目は、「育児において、夫以外の協力が得られるか」、「育児における夫以外の協力者」、「教室の開催を知ったきっかけ」、「教室に参加した満足度」、「知りたい内容は含まれていたか」、「将来サークル活動に参加したいか」、「教室後の交流会についての意見・感想」、「行政やサークルへの意見・要望」等である。

分析方法は、選択法の回答は単純集計を行い、自由記述法は記述内容にしたがって分類した。

6) 倫理的配慮

調査の参加は、自由意思であり個人は特定されないことなど、文書を用い説明し、同意書の提出により参加の有無を確認した。また、本取組みは、本学の研究倫理審査部会での承認を得ている。

7) 教室についてのアンケート調査の結果

2005年～2007年に行った調査の回収率および有効回答率は、妊婦が26名（100%）、夫が15名（78.9%）、祖母が1名（50.0%）であった。

回答者の年齢は、妊婦は、20代が9名（34.6%）、30代が17名（65.4%）、夫は、20代が2名（13.3%）、30代が8名（53.3%）、不明が5名（33.3%）、祖母は50代が1名（100%）であった。

① 出産後の夫以外の協力

「出産後の夫以外の協力」は、26名中、25名が【得られる】と回答しており、「協力できる人」は、【実父母】【義父母】両方が多かった。（図1）

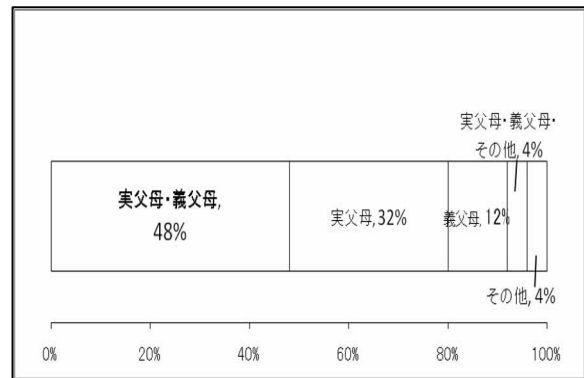


図1. 育児における夫以外の協力者 (n=25)

② 教室の開催を知ったきっかけ

「教室の開催を知ったきっかけ」は、【保健センターからのチラシ】【病院で勧められた】が多かった。また、夫は、【妻に誘われた】が多かった。（表1）

表1. 教室の開催を知ったきっかけ (n=42)

内容	妊婦	夫	祖母(人数)
保健センターからのチラシ	13	3	
病院で勧められた	7	2	
保健センターからのチラシおよび病院で勧められた	4		
市役所で紹介された	1	1	
多胎児サークルからの紹介	1		
妻に誘われた		8	
娘に誘われた			1
未回答		1	

③ 教室に参加した満足度

「教室に参加した満足度」は、【期待通り】～【まあまあ期待通り】が多かった。（図2）

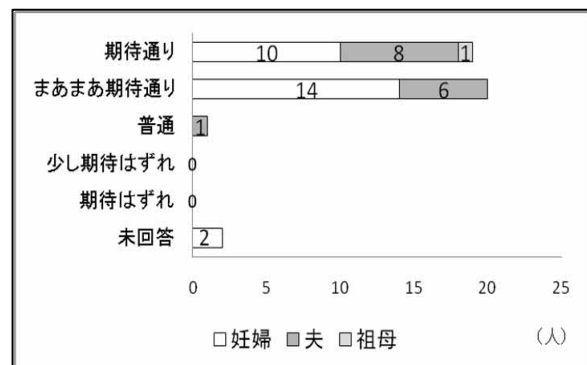


図2. 教室に参加した満足度 (n=42)

④ 知りたい内容は含まれていたか

「知りたい内容は含まれていたか」は、【ほぼ含まれていた】～【大体含まれていた】が多かった。（図3）

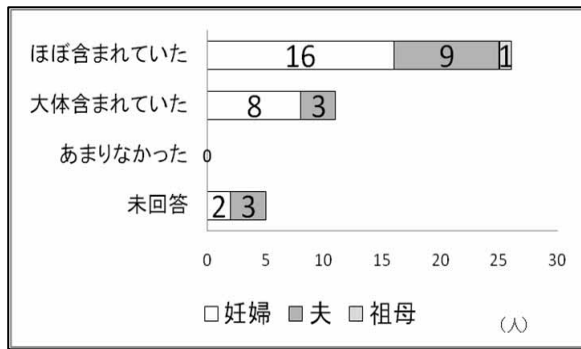


図 3. 知りたい内容は含まれていたか (n=42)

⑤疑問や不安は解消されたか

「疑問や不安は解消されたか」という問いは、妊婦では、【解消された】が 22 名、【解消されていない】が 1 名、未回答が 3 名であった。夫と祖母は、全員が【解消された】と回答していた。

⑥教室後の交流会についての意見・感想

「教室後の交流会についての意見・感想」は、回答者の多くが、交流会での話は参考になったと回答していた。(表 2)

表 2. 教室後の交流会についての意見・感想 (n=42)

(妊婦)	人数
いろいろな話が聞いて良かった	8
実際に育てられた方のアドバイスが心強かった	3
先輩ママやパパの話が参考になった	3
今までより少し不安がなくなり、「どうにか育てていけそうだなあー」という気持ちになった	1
産む前にいろいろな心がまえができて、良かった	1
とても楽しかった	1
普通の母親学級では、単胎のことしかわからなかったのに、大変さもわかったが、現実的に考えられるようになった	1
双子のお母さんお父さん、専門機関の方のお話がとても役に立った	1
もっと多くの情報、(時間もないので、レポートにまとめたものをいただけたりすると嬉しい) が得られたら良い	1
覚悟はしていたが、生の声を聞いて思っていた以上だった	1
妊娠中のママだけの限定の方が話しやすいのではないかな?	1
未回答	4
(夫・祖母)	人数
体験された方の生の声が聞いてとても参考になった	7
出産、子育てに対してあらためて妻に協力しようと思った	2
なんとかなりそうな気がした	1
男性の場合の話が聞くことができて良かった	1
双子ならではの話も聞くことができて良かった	1
未回答	4

⑦将来、サークル活動に参加したいか

「将来、サークル活動に参加したいか」は、【参加したい】と回答した対象者が多かったが、【特に考えていない】と回答した夫も多く見られた。(図 4)

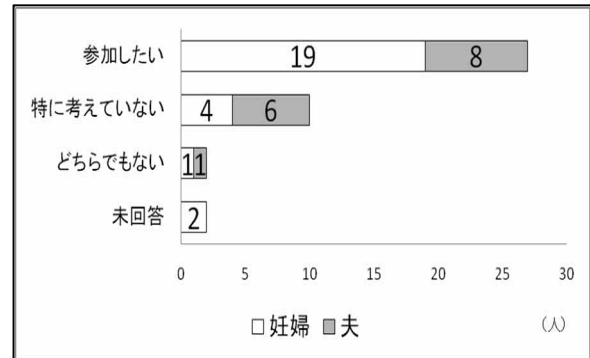


図 4. 将来サークル活動に参加したいか (n=41)

⑧今後の育児支援として、行政やサークルへの意見・要望

「今後の育児支援として、行政やサークルへの意見・要望」は、経済的支援についての要望が多く見られた。(表 3)

表 3. 行政やサークルへの意見・要望 (n=42)

(妊婦)	人数
未永い交流	1
行政で出産について改善してほしい	1
妊娠、出産にも保険が適用されるようになってほしい	1
どうしても人手がいない時に、面倒を見てくれる(ボランティア)サークルが近くにあるといい	1
必要となる分の費用等を少し安くしてほしい	1
情報交換の場があると楽しい	1
いろいろな不安が少しでも解消されるように情報がいつでも得られること	1
子どもの医療費無料の年齢を引き上げてほしい。保育園の数をふやしてほしい	1
子どもにかかるお金を市でもっと負担して欲しい、妊娠中にも、家事の手伝いをしてくれる人がいて欲しい	1
こんなこと聞いても大丈夫かな?と思うようなことも、気軽に聞けるような雰囲気がある機会が、たくさんあると嬉しい	1
初めての出産なので、まだよく分からない	1
今のところ特にない	1
未回答	14
(夫・祖母)	人数
特にまだ考えていない	3
双子の経済的支援制度	1
少子化対策に多胎出産へのメリットを加えて欲しい	1
育児サークルの充実や、職場での育児保障の環境を充実してもらいたい	1
このようなイベントが他にもあるとよい	1
色々な費用、サービス等の情報が欲しい	1
少子化が進行しているので、行政が少しでも子育てしやすい環境(金銭的)を整えて欲しい	1
未回答	7

以上より、双子のプレママパパ教室は、妊婦とその家族にとって、情報を得るだけではなく、育児のイメージ作りに有効であった。また、サークルから生の声を聞き、多胎家族が交流することによって、悩みなどの共有を図ることができた。さらに、今後の教室の運営方法や、支援の方向性も明らかになった。

3. プレママパパ教室後のフォローアップ調査

1) 調査対象および方法

平成20年度の教室に参加した妊婦4名に対して、教室参加の約1~8週間後に、妊娠期の質問紙調査(2名)および面接調査(2名)を行った。

2) 調査内容

調査内容は、妊娠期における、親族の発言や支援、望むこと、妊娠中の不安、医療・行政サービスで役に立ったことや今後望むこと等である。

3) 倫理的配慮

教室に対する意見の調査と同様、調査の参加は、自由意思であり個人は特定されないことなど、文書を用い説明し、同意書の提出により参加の有無を確認した。また、本取組みは、本学の研究倫理審査部会での承認を得ている。

4) 結果

(1) 対象者の概要

対象者の概要は、表4の通りである。

年齢	20代後半~30代後半
妊娠週数	23~32週
妊娠の種類	自然3名、不妊治療1名
分娩回数	初めて3名、4回目1名
家族構成	夫3名、夫・子1名
里帰り分娩	あり3名(産前16週~、産後2~6ヶ月)なし1名
産後の手伝い	あり3名(夫、実父母)、なし1名
キーパーソン	夫・実父母・子

(2) 妊娠期の各質問項目に対する回答

- ①「双子であるとわかった時の親族からの嬉しかった発言」は、【あった】と全員が回答しており、夫、義母、義父からの発言であった。
- ②「双子であるとわかった時の親族からの不愉快な発言」は、【あった】と1名が回答しており、義母からの発言であった。
- ③「妊娠中、不安に思ったことはあったか」は、【あった】と全員が回答しており、【妊娠が継続するか】【おなかの張り】であった。
- ④「親族の発言や援助で良かったこと」は、【あった】と全員が回答しており、【サポート】や【気遣い】であった。

⑤「親族の発言や援助で良くなかったこと」は、【なかった】と全員が回答していた。

⑥「今後の妊娠生活また育児において、親族の援助として望むこと」は、【育児】【家事】【外出時の手伝い】であった。

⑦「医療施設や行政サービス、親族以外の発言や支援で役に立ったこと」は、【あった】と全員が回答しており、【双子のプレママパパ教室】【近所の人からの言葉】【市および病院主催の母親教室】を挙げていた。

⑧「医療施設や行政サービス、親族以外の発言や支援で嫌だと感じたこと」は、1名が【あった】と回答しており、【双子を育てた人からの発言】を挙げていた。

⑨「あればいいと思う医療サービスや行政サービス」は、【妊婦健診費の無料化】【知識・情報の提供】【チャイルドシートの貸し出し】【サークル活動への参加】であった。

これらの教室後の調査によって、教室だけでの支援に留まらず、妊娠期から育児期にかけての一貫したサポートの必要性が明らかになった。

4. 多胎児を育てる家族のつどいの実施(B市)

1) 開催について

集いは、8月と11月の2回実施した。また、年3回の開催が予定されており、3月に3回目を開催する。

2) 実施内容

集いの始めに全員が自己紹介を行い、その後、フリートークを行った。開催1回目は、参加者に「他の方に聞いてみたいこと」「日常利用する、子連れで出かける場所」などの事前調査を行い、これらの情報をもとに、情報交換の場を設けた。

3) スタッフ

スタッフは、B市保健センター保健師、子育て支援センター(開催場所)の保育士、母子保健推進員および本学教員であった。

4) 結果

1回目は8組、2回目は3組の現在育児中の多胎児家族が参加した。

開催1回目の事前調査結果について、「他の方に聞いてみたいこと」、「日常利用する、子連れで出かける場所」、「その他」の意見に沿って、情報交換を行ったところ、それぞれの経験談や疑問などの意見が活発に出され、多胎児を育てる家族にとって、大変有意義な機会となっていた。

また、フリートークでは、「日頃困っていることや質問」、「育児中の体験」、「集いや多胎児サークルに対する意見」などが話し合われた。

参加者からは、今回の集いのように、多胎児家族が集まる機会があることは、大変望ましいという意見が聞かれた。多胎児サークルに対する意見として、今後、サークルを作っていきたいという意見もみられた。

IV. 看護実践の方法として改善できたこと・変化したこと

A市においては、双子のプレママパパ教室開催にあたり、今年度より、5市が持ち回り制で開催することを決定した。その結果、1回目は、A市以外からの参加者のみであり、その都度、広域で支援する協働体制について話し合い、実施することができた。

B市においては、多胎児家族のニーズが徐々に明らかとなり、改めて多胎児家族および多胎妊婦の支援の必要性を考えることができた。

V. 現地側看護職者の受け止めや認識

A市では、様々な視点から意見交換を行い、それぞれの担う役割と連携の大切さについて、再度考えることができた。また、今後も、広域を対象として開催し、定期的に話し合いを設け、検討していく予定である。

B市では、多胎児家族が抱える多くの問題から、今後も定期的な集いの開催が望まれると考え、集いの実施方法や多胎児サークルへの取組みについて検討する予定である。

VI. 本学教員がかかわったことの意義

看護実践の改善として、A市においては、行政、病院、サークル、本学教員が共に、教室の運営方法や支援の方向性について、話し合いを設けたことによって、対象者のニーズを確認し合い、スタッフ間の連携を有効に図ることができた。

B市においては、本学教員も集いに参加することによって、参加者のニーズを把握し、支援の方向性を考えることができた。また、サークルに向けての準備について、今後も情報提供をし、協働体制を作っていく予定である。

また、大学教育の充実として、共同研究者が所属する施設は、実習施設でもあり、共同研究の試みを学生に紹介するなど、妊娠期から育児期にかけての支援の重要性や、行政と病院の協働について学ぶことができた。

看護職者の生涯学習支援は、保健師にとっては、助産師が行っている具体的な援助方法を知ることができ、助産師にとっては、退院後の支援体制

や制度について知ることができた。このように、お互いの専門性を共有することができ、多胎児支援に対する意識が高まった。

VII. 考察

多胎妊婦とその家族は、様々な支援を必要としており、できる限り不安や疑問を解決、もしくは最小限にし、また、安心して妊娠期を過ごすことができるよう、支援を行っていくことが重要である。

今回、A市における4年間の取組みについて、振り返ったが、行政、病院、サークルの連携も徐々に取れるようになってきており、定着してきた。この教室は、A市のみから始まったが、広域の市で協働し合いながら開催していくという試みは、地域の特色を活かした取組みであると言えよう。今後も、広域で協働し合い、行政、病院とサークルの話し合いによって、より参加者のニーズに沿った教室が継続されることが望まれる。また、教室の開催に留まらず、妊娠期から育児期にかけての継続的支援、個別の対応など、多胎妊婦とその家族へのニーズに即した支援の更なる検討をする必要がある。

B市においては、集いの開催は、今年度で2年目であり、事業化されてきている。今後、さらに対象者の意見に耳を傾け、ニーズを捉えながら、行政として可能な多胎児支援をしていくことが望まれる。

このように、それぞれの地域の特色を捉え、それに合った支援の方法について、様々な方面から意見を出し合い、話し合っていくことが重要である。

VIII. 共同研究報告と討論の会での討議内容

1. 双子のプレママパパ教室のプログラムは、何に基づいて作成されたのか。

→この教室は、行政・病院・サークル・大学がそれぞれの専門性を発揮して行っている。開催後に参加者から募った意見を次のプログラムにフィードバックしながら行っている。また、妊娠期に必要な支援を考えていく上で、多胎児サークルの母親の声なども参考にしている。

また、妊娠中からの支援が必要であり、サークルがあれば教えて欲しいという結果も出ている。「具体的に何がどう大変か？」ということは、医師の説明だけでは分かりにくく、病院に入院している人は、助産師の支援

を受けられるが、正常な経過の妊婦は地域で支援していく必要がある。

また、多胎妊婦の治療は特定の病院へという集約化が進みつつあること、多胎児サークルにはインターネットによる相談が寄せられること等、社会や生活スタイルの変化によって、今後の支援方法も検討していかなくてはならないと考えている。

専門職や当事者が皆で協働して関わることで、多胎の妊娠、出産、育児をイメージできるように支援している。

2. 教室開催後のフォローアップについて、サークルに参加したくないという人や1回参加のみの人への対応はどうしているのか。教室で明らかになったニーズや問題点への改善策についてどのように考えているのか。

→教室後のフォローアップ調査の結果は行政や病院に返している。また、双子のプレママパパ教室という試みは、県内でも初めてであり、ようやく根付いてきたところである。フォローアップ調査でニーズを把握し、継続支援が行われよう、今後検討していく予定である。

保健センターは、妊娠の全数を把握しているの、教室後の現状とどのような支援を必要としているのか、また、サークル活動への参加を希望している対象が、参加しているのか、していないのかを把握することが必要である。

3. 育児を行う上で、地域・行政・病院・当事者とのつながりが大切である。どのように最初のつながりを設けることができたのか？

→A市では、現在も活躍している多胎児サークルが、すでに行政と連携していたこと、病院とも良い関係が築けていたということが基盤となっている。当事者をどう育てていくか、自主サークルや母親同士のネットワークをどう位置づけるかが大切である。それぞれが、お互いの立場を尊重しながらどう関わっていくのかについて、考えていかなければならない。

B市では、当事者がサークルを育てていて欲しいというニーズの基に支援を行っている。

次年度はA市以外の地域でも取り組んでいけると良い。また、それぞれの地域で、支援の方法を模索していく必要がある。

文献

- 1) 財団法人母子衛生研究会：単産-複産(複産の種類)にみた年次別分娩件数及び割合(平成7年～平成18年)、母子保健の主なる統計、母子保健事業団；58, 2007.
- 2) 前掲1) 57.
- 3) 佐藤郁夫：双胎妊娠・分娩管理マニュアル、産婦人科の実際別冊；31-33, 金原出版株式会社, 2005.
- 4) 服部律子：乳児期の双子を持つ母親に関する分析と考察, ペリネイタルケア, 21(8);78-84, 2002.
- 5) 藤原由美子, 藤原由美, 須山由梨子：多胎児をもつ母親の育児に関する産前・産後の悩み事, 日本看護学会論文集母性看護, 35; 137-139, 2004.
- 6) 尾前沙織, 谷尚子, 安代晋吾, 他：双生児を育てる母親の生活実態の検討, 藍野学院紀要, 19; 59-66, 2006.
- 7) 服部律子：双子の母親の育児不安に影響する要因—不妊治療と育児の実態—, 母性衛生, 48(1); 38-46, 2007.
- 8) 服部律子, 布原佳奈, 名和文香：地域における行政と育児サークルが協働で行う多胎児支援, 岐阜県立看護大学紀要, 7(1); 29-35, 2006.